

守護者の誓い

ガンマン八号

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大切な人から見捨てられ、大人たちから見限られ、堕ちていく。

そんな俺を救ってくれたあの人は、ある日忽然と姿を消してしまった。

探し続けて早数年、ある日一つの出会いが僕の人生は急激に変化していく。

今作は『ペルソナ5』にオリジナルキャラクターを入れた上でのストーリーを展開しております。『ペルソナ5R』のストーリー、人物は一切関与しませんのでご了承ください。

オリジナル設定や要素が入っておりますので、ご注意を。
間違いやおかしな点がございましたら、遠慮なく教えてください。

目次

開始	11
prologue	1

prologue

「今日も収穫なし、か。やっぱ1人じゃ無理があるな…」

持っていた資料を作業机の上に放り投げ、布団へと倒れ込んでしまう。疲労が着実に体に染み付いてきているのがわかる。頭に手を置き、ふうとため息を1つこぼし、天井を見つめる。

ああ、そういえばそろそろレポート課題の提出期限だったなということを思いだし、さらにもため息がでてしまう。

「…:そういうえば昨日は臨時収入があったっけ」

近くにあるリサイクルショップで1日だけ働かせてもらった。しかし接客をするとは一切なく、品物を並べたり、店内を掃除するくらいしかやることがなかった。

店主さん曰く、「ウチを頻繁に利用する貧乏学生は君くらいなものさ」と言われた。お金がないのは確かだが、そんなはつきりと言って欲しくはなかった。

5時間バイトで5000円をいただいた。こんなにもらってもいいのかと思っただが、「わたしには使い道がない」と無理矢理にでも握らせた。素直に感謝した。給料をたくさんいただいたいて損することなどないのだから。

「…コーヒー飲みに行こ」

自然と口に出た辺り、だいぶ疲れてきているのだと認識が強まる。あそこのコーヒーを味わいたい時は決まって自分に限界がきている時だからだ。お店自体の雰囲気も好みであり、客も多くないため、課題に追われている時はお店で作業をしている。

帰る度に「コーヒー一杯に何時間も居座りやがって」と決まり文句がいつも飛んでくる。接客業でその態度はいささかどうかと思うが、不思議と不快感は全くなく、いつも苦笑いを浮かべてしまう。マスターも文句は言いつつも、絶対に追い出したりしないし、お代わりの催促をしてくることもない。

あの場所は僕の数少ない癒しの空間となっている。アパートからも近い距離にあるため、歩いていけるところがまた良い。

一度決めたらどうやら身体はやる気になったらしく、手提げ袋にノートパソコンを入れ、出かけるために着替えを行なっていた。しっかりとドアに鍵を掛け、暗い夜道を歩く。

「うおー！」

歩いていると、横から左肩あたりに何かぶつかつた衝撃がくる。横道から誰かが急に飛び出してきたらしい。確認しようと横を向く。暗いためよく見えないが、どうやら小さな女の子らしい。随分と大きな眼鏡をかけている。

「えっと、だいじよう「す、すすすすすみませんっしたー!」ぶ、みただね……」
心配して声をかけようとしたが、女の子は明らかに焦りまくり、謝罪をした後、急いで来た道に戻って行ってしまった。

一人で夜道に知らない男性にぶつかってしまい、ビビってしまったのだろう。性格からして人見知りが激しそうな子だったし。

にしてもこんな時間に女の子一人とは少し危ない。ぶつかった相手が自分だったからともかく、最近は何騒な事件が多いのだから。

「物騒な事件、いや精神暴走事件か。こんな時、あなたならどうするのですか、先生」
ポツリと呟いた独り言も、闇に吞まれ、消えていく。そんなどうしようもない現実には嫌気がさし、ため息はついに笑いへと変化していた。

ああ、ダメだ。完全に疲れている。疲れ切っている。あれからも何年経過したのだろう。

決意を決め、今まで一人で頑張り続けたが、限界だ。いや、はなから限界だった。あの日から僕は一步も進めていない。一步を踏み出しても、その先には道がないのだから。

道が無ければ、人は歩くことなんかできないから。

時が経つにつれ、己の無力さを思い知る。僕は結局、この程度なのか?あの日から何

もできず、何も変わらず、そんな無駄な時間を過ごして、後悔して死んでいくのか？

「ダメだダメだ。落ち着こう、落ち着かなきゃ」

悪い思考を振り払うかのように頭を振る。今の自分は完全に参っている。こんなんじゃないややつても上手くない。なにより、こんな悲劇のヒロインぶってる自分が気持ち悪い。

「明日は1限からあって、午後はバイトか。いい加減切り替えないと」

そんなうじうじ思考から抜け出した時、ちようどお店に到着した。軽く店内を覗く。どうやら客は自分以外来てないようだ。集中したかったので、これはちようどいい。

「いらつしゃ…て、なんだお前か。こんなしけた店に来るなんて、よほどお金がないんだな」

「そんな態度ばつかだから、こんなしけた店になるんじゃないですか？総治郎さん」

一度は普通に接客をしようとするが、こちらを見た途端ため息をつくのは、この喫茶店、ルブランのマスター、佐倉総治郎さん。こちらに住み着いて2ヶ月ほど経つが、僕が1週間に一度のペースで来るため、すっかりこんな態度だ。

しかしこんな態度が、何故か僕には心地よいのだ。傲慢な大人たちが嫌いだつたはずなのに、いぎ言葉にしようとするのと難しいのだが、とにかく好きなのだ。

「座りな。どうせいつものだろ」

「さすが総治郎さんだ。客が少ないだけあって、僕のことすっかり覚えてもらえてるよ
うで」

「別に好きで覚えてるわけじゃねえよ。お前みたいな若造がこの店に来ることなんか
ねえからな」

「そうですか、それはもつたいない。店員の態度さえ除けば素晴らしい店なのに」

「今日はいつになく辛口だな。あんま文句ばつか言うど追い出すぞ」

「ああ、すみません。ちよつと嫌なこと続きで、つい八つ当たりしてしまいました」

「嫌なこと、ね」

総治郎さんはコーヒーを入れる作業に入る。待っている間にも、パソコンを起動し、
レポート課題を仕上げるための作業に入る。途中までは学校で仕上げたのだ。もうあ
と半分、がんばろう。

「ほらよ、熱いから気をつけな。ったく、お前はここに来るといつもカタカタと作業ばつ
かしてんな」

「宿題や仕事は家に持ち帰りたくない主義なんですよ。基本は学校で終わらせるんです
けど、予定が重なるかどうかしても持ち帰らざるを得ないものでして。ここは基本静か
すし、なによりコーヒーが飲めますから」

「コーヒーならそこらのコンビニで安くて大量に飲めるだろ？」

「失礼、1つ訂正を。なにより美味しいコーヒーが飲めますから」

「フンツ、野郎に褒められてもねえ」

「いただきます」と言った後、カップを持ち、コーヒーから溢れ出す湯気の香りを鼻いっぱい吸い込む。ああ、なんて優しく、存在感のある香りだろうか。匂いは鼻から脳まで直接届くような錯覚に陥り、先ほどまで感じていた疲労感が溶けていくのを感じる。

「このコーヒーを味わってから、コンビニなんかで売っているものでは決して満足できなくなってしまうのではないか。」

香りを十分に楽しんだ後、そつと一口、味わう。ああ、なんと素晴らしい苦味だ。苦味から幸福感を味わえるなんて、ここに来るまで思いもしなかった。

まるで金属のように固くなっていった全身の筋肉から緊張が抜け、柔らかくなる。無理した笑いから、自然と笑顔が溢れてしまう。

「美味しいです、本当に。なんでもっと早く出会えなかったのか後悔してしまうほどに」
「なんだ、今日はやたら喋るな？さつきまで辛口だったくせに、コーヒー飲んだら甘々になっちまって。そんなにストレス溜め込みなのか？」

「いや、まあ、そうなんですかね。でも、このコーヒーを飲んだら、いつのまにか元気を取り戻せるんです」

「そうかい。若い奴にここまで評価してもらえるなんて、これならまだまだ続けられそうだな」

「若いバイトも入りましたしね。あれ？でも今日は蓮くんいないんですね」

「バイトじゃねえよ。それに毎日手伝わせてるわけでもないしな。まっ、あいつも学生だしな、学生生活をエンジョイしてるんだろ」

「高校生は学生ではなく、生徒ですよ総治郎さん。学生は僕のような大学生を指すんです」

「あんま細かいこと言ってる、舌引っこ抜くぞ」

「それは困ります。では黙って作業に入りますか」

この店では何故か口が軽くなり、気がつけば話し込んでしまう。こんなに誰かと話をするのはこの店、いや総治郎さんと蓮くんくらいなものだろう。特に蓮くんは今年この場所に引越してきた者同士、何かとよく話してしまう。彼は何処か不思議だ。なんでも話してしまうというか、気を許してしまうというか。

彼と総治郎さんは、不思議とあの人と何処か重ねてしまう。いや、重ねるといふより、関連させられるというか。

ネットサーフィンをしていて、ある記事を読んでいたらある話題が思い出すというか……ふと見たお土産の品から、その土地の光景が浮かんでくるというか、そんな感じだ。

資料を確認しながらパソコンに文字を打ち込み、レポートを仕上げる。コーヒーは冷める前に飲み干す。

できることならお代わりをもらいたいのだが、貧乏学生にそれは叶わないのだ。泣く泣く我慢しなければならぬ。

「ーっ、よし。これで終わり、と」

データをメモリに保存し、パソコンを閉じる。作業から解放されて、腕を思いつきり伸ばす。随分と長い間没頭してしまったようだ。

「おい、もうすぐ閉店だぞ。終わったんなら、とつと帰りな」

「もうちょつとコーヒーみたいマイルドな声かけできないんですか？まあ、終わったので帰りますけど」

「コーヒー一杯で長時間居座るの許可してやってるだけありがたいと思えよ。それに……うん？」

携帯の着信音が鳴り響く。どうやら総治郎さんの電話らしい。

「おう、どうした。……ああ、もう店を閉めるところだよ。あと貧乏学生を帰すだけだ」

あんまり本人の前で貧乏学生と連呼しないでもらいたいが……それにしても総治郎さん、あんな顔できるんだな。

すごく優しく、楽しそうで。

相手の声はよく聞こえないが、女性なのか？恋人？家族？
それとも……。

『ええ、わかってるわ。じゃあ、また明日』

……………？何故だ？

「おい、いつまでボサツと突っ立ってんだ。…ああ、気にすんな。中々帰ろうとしなかったから。わかってる、いつものやつな」

「え？あつ、はい。お代ここに置いておきます」

我に返り、お代をカウンターに置き、店を出る。帰り道を歩きながら、先ほどの総治郎さんの姿を思い出す。

（なんでだ？もうこの店に通いつめて2ヶ月以上経ってるのに……なんで今さら見えたんだ？）

自問自答を繰り返しながら、ふと空を見上げる。あの時はよく空を見上げていた。

が、今は夜だった。それに曇っており、ただ真つ暗な空が広がっているだけだった。

「明日は、晴れるかな」

ポツリと呟いた独り言。当然返事をしてくれる人なんていない。それに今は梅雨のシーズン。明日は一日中雨だと予報で聞いていた。

(もう寝よう。なんか今日は調子狂う日だ)

そう決めた僕は、布団を敷いて夢の中へと旅立つため、自宅へと急いだ。

『……………！今、僅かに』

『ついに、か』

その日、夢の中で巨大な鎖のようなものを見た気がした。

開始

『あつ、おはよう先生』

『おはよう。それと、私は別に先生じゃないって前も言わなかったかしら』

『いいんだよ。俺にとって先生は、先生だけなんだから』

『あらそう。なら早く私以外の先生とも出会えるといいわね』

『先生以外の先生？ いらないよそんなの。つか、いねえよ。先生がいてくれれば、俺はそれでいい』

『それはダメ。出会って、本当に素敵なものなのよ？ 私とあなたがこうして仲良くなれたように、あなたが夢中になれる誰かを見つけないと』

『……見つけられるかな？ 俺に』

『できるわよ、君なら。そうだ！ なら今度私の●●と………』

「……随分とまあ、素敵な目覚めで」

一人暮らしの自分に対し、皮肉めいた発言を目覚めに一言。疲れがとれたかと思いきや、どうやらストレスまではとれなかつたらしい。

目覚めたてということもあるかもしれないが、なんとなくだるい気がする。寝ていたはずなのに、精神的に疲れてるようだ。

できることならこのままもう一度布団に倒れ込んでしまいたいが、今日は学校のある日だ。1日でも休んで授業の内容に支障が出てしまうのはまずい。特待生で大学に通ってる身としては好成績を維持しなければならないのだ。

「先生以外の誰か、結局達成できてないなあ」

それは後悔なのか、悲しみなのか。

これ以上は良くないと思いを切り替え、朝食の支度を始める。といっても、昨日の夕飯の残りを温めなおすだけなのだ。

「いただきます」

両手を合わせ、食事への感謝を忘れない。教えられたことだから、守らなければならぬことだ。

朝食を済ませたら身なりを整え、お弁当のおにぎりを握る。それと野菜も忘れない。

「あつ、おはよう蓮くん」

「おはようございませ、透さん^{とわろ}」

家に出ると、見覚えのある青年の制服姿が見えたので挨拶をする。彼も愛想の良い笑顔で返してくれる。それが嬉しくて、こちらも笑顔が溢れる。

「いいよ、そんな丁寧に喋らなくて」

「あつ、そうでし…：そうだった。透も学校？」

「そりゃ学生だからね。よかつたら駅まで話していかない？」

「わかつた」

癖つ毛の強い眼鏡をかけた、一見地味そうな高校生、雨宮 蓮くん。でもよく見るとすごい美形なんだよな、彼。背丈も俺より少し大きいし。

お互いここに引越してきた者同士ということで話をしてみたら、彼はどうやら聞き上手だったようで、気づけばこうして会話をする機会が増えている。こちらが年上ということで敬語を使ってくれていたが、どうも距離を感じてしまうので敬語をやめてほしいと頼んだら、意外とすんなり聞いてくれた。

大人しそうに見えるが、実は大胆だったりする。

「そういえばこうやって話すの、結構久しぶりだよ。最近はずりも遅いみたいだし、忙

しゅわ。」

「そうだな。友達とよく色々なことをしてるから、どうしても帰りが遅くなる」

「友達と、か。いいね、蓮くんが言うのだからそれは良い人達なんだろう」

「透の方は？」

「いつも通りさ。大学とバイト生活。たまに総治郎さんのありがたいお言葉をいただくの繰り返し」

「それは楽しそうだ」

「蓮くんも最近皮肉が鋭くなってきたね……。総治郎さんみたいにはならないですよ？流石にこたえる」

「透も友達と遊べば？」

「君以外の友達がいないと知ってて言ってるのなら、デコピンするよ？」

「なるべく優しくしてくれ」

「やつぱり蓮くん、ノリがいいんだね。いいよ、デコピンは水に流す。流すから前髪下ろしていいよ」

可笑しくてケラケラと笑ってしまう。こんな茶番に付き合ってくれるなんて、しかもセンスが良い。彼もまた笑っている。

またこんな楽しいと思える日が来るとは、人生は本当にわからないものだ。

駅に着くまで彼と雑談を続けた。彼の話もとても面白いものが多かった。随分と個性的な友達を持つてようのだ。

「…最近、若者を中心に『怪盗団』を支持する声が増えていく一方です。彼らは一体何者なのでしょうか?」

ビルについてる大型のモニターで流れているニュースをちらりと見る。家に小型テレビが一応あるが、節電対策のために滅多につけないようにしてる。しかし、精神暴走事件が起こっていたところに、突如現れた心の怪盗団。なんでも大物有名人の罪を告白させ、世界を良くしようとしているヒーロー、らしい。

「怪盗団ねえ。蓮くんはどう思う? 怪盗団って、実在するかな?」

「…実在してる、と信じたい」

「へえ、どうして?」

「正しいことをしているから」

「なるほど、至ってシンプルで、わかりやすい回答だ」

あまり表情の変化がわからない蓮くんが、少しだが顔を歪ませた。怪盗団に対して、何やら特別な思い入れがあるように思えた。

「透は?」

「うん?」

「怪盗団、どう思ってる?」

「俺かあ。そうだね、ニュースでの情報ぐらいしか知らないけどすごい一言だよ。誰も気づかなかった、いや手が出せなかつたというのが正しいのかな? そういった相手から罪を告白させるなんて、まさしく超能力を疑いたくなるよ」

俺の言葉を、蓮くんはいつもより真剣な表情で聞いている。なんだろう、怪盗団のファンなのだろうか。たしかに彼も正義感は一倍強い人間だ。

もちろん、俺もファンというわけではないが、怪盗団の動きについてはすぐに食いついた。

「たしか、最初は蓮くんの通っている高校の元メダリスト教師の鴨志田から始まったよね。その後は美術界の巨匠、斑目。そしてついこの間は警察が手を焼いていたマフィア、金城。どれも大物有名人だ。世間の食いつきが凄まじいものになった。正体も方法も不明。謎ゆえに話題になり、そして苦しんでいた人たちから賞賛を得られる」

「もちろんなかには『法律に基づかない私刑は正義から一番遠い存在』とか否定的な意見も多い。でもね、それでも俺は怪盗団は存在してるし、彼らはこの世で最も正しいことをしてると思うよ」

「だって、誰にもできなかったことを成し遂げてるんだからさ。何もできない俺たちがどうこう言うことじゃないと思うんだよね」

少なくとも彼らは俺たち普通の人間とは何か違う、特別な力を持っているはずだ。それは使いようによっては、恐ろしい兵器になる何か。

だがそれを心配する必要は怪盗団にはない。小さな子供にナイフを持たせるのが危ないように、ようは使うものではなく、誰が扱うかが重要になる。怪盗団はそれがわかってるのだろう。

それに、もしかしたら。

つながってるかもしれないしね。

『そういえば先生って、研究者だったよな』

『そうよ。そして君はその被験体のはずなのに、いつのまにか生徒になっちゃった』

『少なくともマッドサイエンティストには向いてないからな先生は。というか、ちゃんと研究進んでんか？いつも遊んだり雑談して終わりだけ』

『もちろん！私を誰だと思ってるの？研究は順調よ、あなたが気づいてないだけ』

『特撮鑑賞会が研究とは思えないんだよなあ』

「透？もう駅に着いたけど」

「……………えっ？あ、ああごめんね。ちよつと思考が奥深くまで潜り込んでた。じゃあ学校頑張ってね」

どうやら気がつけば駅に着いてしまっていた。いけない、たまに思考が奥深くまでいくと周りが見えなくなってしまうのは悪い癖だ。

蓮くんとは電車がちがうので、ここで別れることになる。手を軽く振ってから自分の乗る電車に向かう。彼の方にチラリと振り向くと、金髪の青年と話し始めている。こちらは時間にもやや余裕がある状態で到着できた。

（『心』の怪盗団、そして精神暴走事件。絶対に何か重要なつながりがあるに違いない。必ず情報を得てやる！）

拳には自然と力が籠るのを感じた。

今日もあつという間に時間が過ぎてしまい、気がつけばもう帰りの時間になっていった。大学の学生の噂話やネットにあるいくつかのサイトには多くの怪盗団に関する話題が飛び交っている。

が、どれも信憑性のかけるものばかりだった。正直有力な情報は一つも見つかっていない。

というより、そもそも判断基準がわからない。こういうところで、自分の非凡な頭を恨む。

「まあ、ネットや噂話なんてこんなものだよな。ほぼ全てデマしかないだろうし、仮に事実があつたとしても見分ける方法もないしなあ」

はあ、とまた自然とため息が出てしまう。今日もまた収穫は一つもなかった。今は渋谷の駅広場にあるベンチに座って、適当にくつろいで乗り換えの電車を待っているが、正直疲れが取れる気がしない。

「…あれ？なんだこれ？」

次の電車時刻を調べようとスマホの電源を入れると、そこには見覚えのないアプリがインストールされていた。赤黒い目玉が不気味なアプリだ。こんなもの入れた覚えがない。

「なんだこれ、気持ち悪い。ウイルスとか持つてる悪質なアプリか？これどうしたらいいんだろう。消しても問題ないのかな」

本当ならさっさとアンインストールするべきだと思うが、勝手に入っていたという事実と見た目のダブルパンチの不気味さを感じてしまっている。この手のアプリに触る

とどうなるか、警戒心が強くなる。

クソツ、携帯が壊れるなんてことになったら洒落にならないぞ。一体幾らかかっているとってんだ。それに世間のニュースをいち早く知る、貴重な情報源だぞ。

「……よし、全会一致だな」

「今回のターゲットは1人だ、行くぞ」

「あれ？蓮くん？」

なにやら聞き覚えのある声が近くから聞こえてくると思ったら、すぐ近くの人混みに蓮くんがいた。それも何人かお友達と一緒に。

（全会一致？ターゲット？なんだろう、何かのオンラインゲームの話でもしてるのかな？）

何やら会話をしてるのはわかるが、いかんせん人混みのせいであまり聞こえない。話の節々からゲームの話題かと思っただが、それにしても蓮くんたちの顔がどこか険しい。（うーん。どうやらあまり楽しい会話をしてるわけではなさそうだなあ。でも僕が何かできるわけでもないし、蓮くん以外は初対面だしな。遠慮させてしまうかもしれないし）

『わかった？約束よ』

……ああもう！なんだ！なんでここ数日、こんなにも焦る？なんで急にあの時を思い出す？なんだ？一体俺はどうしたらいいんだよ。僕が一体、何ができるっていうんだよ！

「……ああくそ、わかったよ。声かけるよ。だつてほつとけないし、蓮くん友達だし、友達らの友達なら問題ないし」

自分に言い訳を言い聞かせる。側から見たら不審者だが知ったことか。もう最近疲れてるんだよ、イラついてるんだよ。

こうやってうじうじ考えてるのも飽きた。元々俺、こんな人間じゃないし。

「おい、どうしたんだ蓮く……」

なんてことはない、友人に話しかけるのに至つて平凡な声かけだ。手を挙げ、こちらに気づいてもらえるよう近づいたただけだ。

その筈だった。だけど。

『ナビゲーションを、開始します』

その時、文字通り僕の世界が変わった。